

文・皿木喜久

題字・藤渡辰信

拓殖大学八王子キャンパスにある脇光三の碑。戦後にいちど地中に埋もれたが、多くの人の希望もあって再建された  
—中鉢久美子撮影



# 紅陵に命燃ゆ

## 特別任務で散った若き烈士

露の情報探った河原操子

河原操子といえは、戦前の日本では有名な女性だった。明治37年に始まった日露戦争で主戦場となった満州の後背地と言え、内モンゴに、王室の教師として入る。そこでのロシアの動きを探り続けたのだ。

子女の教育に当たる。1年後、今度は内モンゴのカラチン王から女学校の先生として招かれた。

カラチンは北京の北東約300キロ、現在の内モンゴル自治区赤峰市の近くにあった。日本の県ほどの地域で、モンゴルの王が実質支配していた。その王と王妃が親戚で、女子教育を日本人に託してきたのだ。

白羽の矢が立った操子だが、幹旋した北京の内田康哉公使から、思いがけない別の任務を言い渡される。カラチンにおけるロシア人の動向を伝えてほしいということだった。

ロシアは明治33年の義和団事件の後、大軍を満州に居座らせ、朝鮮半島への南進もつかう。反発する日本との間で「開戦必至」の緊張感が高まっていた。日本もさまざまな戦いのシナリオを想定していた。カラチンから内モンゴを北上し、満州のロシア軍を背後から衝くというのもそのひとつだった。だがカラチンもすでにロシアの勢力下になりつつあった。教師として招かれたのを幸いに、その動きを探らせようとしたのだ。危険の伴う業務だったが、操子は臆せず引き受けた。

「諜報員」として訓練を受けたわけではない。武術に秀でた「女丈夫」でもなかった。ただ「女といえども、国の大事に働くのは当然」と思う女性だったのだ。



### その4 脇光三と日露戦争

北京から9日間カゴに揺られ、明治36年12月、カラチン王府に着くと、そこには銀行員や毛皮商人に扮したロシア軍人らしい姿がウヨウヨしていた。大の男でも心細くなるような状況だった。だが、いざという時は「見事目刃せん覚悟」で父親から送られた懐剣を身に任務をこなした。

#### カラチンでの邂逅と別れ

そんなカラチン王府に、中国人ラマ僧などに扮した日本人12人が入ったのは日露戦争開戦間もない



河原操子



脇光三（わき・こうぞう）明治13年12月、浅岡家の三男として東京で誕生。生後間もなく協家の養子となるが、26年養父の死去で、長野師範学校長などをつとめた実父の浅岡一に引き取られる。35年台湾協会学校を中退、清国に渡り、北京の東文学舎に寄宿、天津の北支那毎日新聞社に勤務するなどした後、特別任務班に入る。37年2月北京を出発、チチハル方面に向かうが、4月15日クーロンホ付近で殺害される。享年23。

なお『世界に天賦けた夢と群像／拓殖大学百年・小史』によれば、日露開戦とともに陸軍省から支那語の通訳を求められ、台湾協会学校・台湾協会専門学校の卒業生、在学生96人が陸海軍通訳として従軍した。

明治37年2月28日のことである。伊藤柳太郎大尉、元朝日新聞記者の横川省三軍人、民間人からなる「特別任務班」の第一班のメンバーだった。

特別任務班とは前年の11月、北京で組織された。開戦後、ロシア軍背後の交通・通信網の破壊や情報収集、「馬賊」を利用したの攻撃など攪乱を目的としていた。最高指揮者は青木宣純大佐で、内田公使のもと内モンゴの情報収集を行

#### 兵站線破壊のため旅立つ

河原操子が戦争後、帰国して書いた『蒙古土産』には、このカラチンでの光三との邂逅が美しく描かれている。

光三は日本を出るとき父親と別れができなかったことを悔やんでいた。操子が「自分が先に日本に帰るようなら心情を伝える」と言ううと、元氣を取り戻し、互いにその後の身の上を語り合った。操子は臆として、靴下や肌着などを与え、「神かけて」その任務の成功を祈った。

だが脇光三に武運はついていなかった。第一班はカラチンで6人ずつ伊藤班と横川班に分かれ、横川班に加わった光三は厳冬の内モンゴを北上した。4月11日には、チチハル南方のヤール川に架かる東清鉄道鉄橋に達する。爆破を計画していた鉄橋だ。

決行を前に光三らが偵察に行っている間に、横川らがロシア兵に拘束され、後に銃殺される。光三ら他の4人は再起を期していったん南へ退却を開始した。

だが4月15日、ロシア軍の意を受けた馬賊らに包囲され、内モンゴのクーロンホ付近で、相次いで命を落とすという。その壮絶な死は9月になってようやくわかり、遺骨は日露戦後に派遣された調査団により収集されている。

日露戦争は「国民の戦争」だった。それまでのように、武士や軍人だけが戦うのでなく国民みんなが老若男女を問わず、何らかの形で参加し、勝利に貢献しようとしたからだ。

脇光三や河原操子もそうであった。新聞でその行動が伝えられると、国民はこぞって勇氣と獻身を称えた。現在の日本では恐らく考えられないことである。

（毎週土曜掲載）